



もし石橋湛山なら

浅野 純次

(経済倶楽部理事長)

が完結しました。15巻本は1970年代初めに刊行されていたのですが、創立115周年記念で復刻されたものです。ただし補巻として新たに第16巻が企画されこの40年間に新たに発見された論文や手紙、座談などが収録されました。旧全集を書斎の特等席に飾っている私も、第16巻のゲラを600ページ余、熟読して(結果的に間違いを少々見つけるなどお手伝いをしてながら)湛山のすこさを改めて実感しました。

▼後藤新平に学べという話が盛んです。後藤だったかどうかというのには確かに面白いですが、やはり石橋湛山だったかどうかという点のほう、財政金融政策はもちろん構想力という面からしてもはるかに意義深いのではないかと。豪胆さの点でも、世論に媚びない点でも、そして何より座標軸と志が微動だにしない点で、こんなすごい人はいません。日蓮宗の高僧を父に生まれ、早稲田で哲学を学んだ、そうした背景も大きく預かっていたのでしょう。

▼たまたま東洋経済新報社の『石橋湛山全集全16巻』

▼ところで今年の石橋湛山賞は牧野邦昭・摂南大学講師の『戦時下の経済学者』が受賞しました。牧野さんはまだ少壮の研究者ですが、高橋亀吉研究に熱心に取り組んでいます。私も秀作として推薦した立場ですが、惜しむらくは石橋湛山にはまだ研究が及んでいないので、これから湛山と亀吉をライフワークに取り組んでいただきたいと希望します。この二人は日本の政治家や学者が目指すべき巨峰と言っていると思います。

▼さらに井上亮『ペンと志——非常時と言論人』とい

う本がまもなく発行されるはずで。著者は日経新聞社会部編集委員で、石橋湛山や桐生悠々などの言論人の評伝集ですが、私も取材に協力させてもらいました。ゲラを拝見する限りでは、社会部記者らしい視点があるだけに盛り込まれていてなかなか新鮮です。ともあれ質量ともに湛山ほど多彩な論文を残した人は世界の宰相、ジャーナリストにはいないでしょう。

▼湛山のすごい点は山ほどありますが、一つはその勉強ぶりです。晩酌で赤い顔をしながら書斎へ向かう湛山の姿を、孫の石橋省三さん(石橋湛山記念財団理事長、経済倶楽部理事)はしょっちゅう見たそうです。

私も東洋経済へ入社間もなく(1965年頃だったでしょう)東芝の役員が「石橋さんとは鎌倉から横須賀線で一緒だったが、いつも座席に座るとすぐ本を取り出して読み始める。こちららちらちらと観察しているんだが、東京駅まで一度も本から目を離した様子が見えなかった。しかもいつも洋書だった。あんな勉強家は見

たことがない」と話してくれたのを思い出します。意志の力さえ強ければ何歳になっても、またお酒が大好きでも勉強はできることを湛山さんは教えてくれます。

▼さらにすごいと思うのは、常に相手のことを考える姿勢です。日中関係なら対日ナショナリズムへ立ち上がる中国の人々、日ロならロシア革命下の人々がどう考えるか、常にそういう視点を込めて外交、軍事問題を論じています。湛山の思想は自由主義、平和主義、功利主義、現実主義等々によって裏付けられています。単なる利己主義、自由放任主義ではありません。そこには自律 self-discipline とか自己犠牲 self-sacrifice あるいは自己改良 self-improvement としてその上に他を慮る姿勢が常に基本にありました。今のナショナリズム、そして外交にも、こうした視点は薄れるばかりですが、これは国家間の話であるだけではなく、組織と組織、個人と組織、個人と個人の間においてさえも重要な考え方ではないでしょうか。